
姉【S i s t e r】 i s F R E E D O M

終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉【Sister】is FREEDOM

【Nコード】

N1794C

【作者名】

柊

【あらすじ】

私立徳明館高校に通う赤坂京介と、同じ私立徳明館高校に通う姉の瑞希が織り成すヲタネタ満載の一般人置いてけぼりハイテンション学園ラブコメです。ヲタネタはガンダム多いです。作者の嗜好です。我こそはガンダムオタだというあなた、ぜひとも読んでください。ガンダムオタじゃないあなたも読んでね。半年以上かかってようやく完成しました。お待たせしてすみません。

FILE 01：真実はいつも一つ（前書き）

短篇小说として連載していたものを長篇小説にしたものです。よろしければ完成お願いします

FILE 01.. 眞実はいつも一つ

「京ちゃん」

背後から声がしたかと思うと、急に体が重くなった。色白の腕が俺の首に絡みつき、俺の頬を撫でる綺麗な黒髪からいい香りが漂ってきては鼻孔をくすぐる。どうやらさっきまで風呂に入っていたみたいだ。まだ髪が少し濡れている。そして、背中には発達しすぎた女性の柔らかいアレが押し付けられている……

「鬱陶しいから離れてくれ姉貴……」

俺は冷めた口調で返事をした。

「酷いよ京ちゃん。たった一人の肉親であるお姉ちゃんに向かってそんな言い方するなんて……」

「勝手に親父とお袋を殺すなよ!」

俺は間髪入れずにツツコミを入れる。京ちゃんというのは俺、赤坂京介のことで、俺が姉貴と呼んでいるのは一歳年上の赤坂瑞希のことだ。

ちなみに親父は単身赴任で、お袋も親父にくっついて行っている。お袋が親父と一緒に行く理由は『パパともう一度ストロベリーな新婚さん生活を味わいたいから』という果てしなくわけのわからない理由だった。

だからこの家には高校一年の俺と、同じ学校に通う高校二年の姉

貴だけで住んでる。

「グス……、酷いよ京ちゃん……」

「って、なんで泣いてるんだよ！」

「だって……、グスン、だって……、京ちゃんがお姉ちゃんをいじめるから……」

「いついじめたんだよ！ ……ったく、わかったよ。俺が悪かった」

早いうちに俺が折れる形で取り敢えず謝っておく。でないといつまで続くかわかったもんじゃない。

「じゃあさ、お詫びの印としてお姉ちゃんの唇にごめんねのチュウして」

そう言って姉貴の顔が、薄化粧した女の顔が、艶やかな魅惑の唇が俺に近付いてくる。それは、まるでスローモーションを見ているかのようにゆっくりと。

迫りくる魅惑の唇に俺の心臓は自然と鼓動が早くなる。顔が赤面していくのを自分でも感じていた。

俺と姉貴の唇がドッキングする数センチ前、姉貴の髪の毛から再びいい香りが漂ってきたその刹那、俺は右手を前に突き出して姉貴の顔を遠ざけていた。

「どうして、姉弟でチュウせなあかんのじゃ！」

あくまで平静を装って姉貴にツツコミを入れる俺。

というか、なんで俺の心臓はこんなに鼓動が早くなってるんだ。これがトキメキってやつなのか？ ええい、うるさいぞ鼓動。しばらくの間止まっというろ――

――訂正します。ごめんなさい。心臓さん、動いて下さい。死んじやいます。

そして、俺は生き返った。

「えー、京ちゃんのケチー。……うーん、じゃあさ『瑞希、ごめんって言うって』」

「んなセリフ言えるか！ てか、そもそも何で俺が謝るんだよ」

「うーん……、京ちゃんはお姉ちゃんのペットだから？」

「何だよその理由」

この果てしなく意味不明な理由をサラッと言つてのけるあたりは絶対に母さん譲りだ。間違いない（B Y長井〇和）

「ねー、いいじゃんそんなくらい。ねーいいでしょ。ねーつてば。たつたの一言だよ。ねー……」

「わかったよ。言えはいんだろ言えば。……瑞希、ごめん」

結局ここでも俺が折れる。これ以上貴重な朝の時間を潰されてはかなわない。

「……てへ」

「てへじゃねえよ。自分で言わせておいてなに照れてんだよ！ ……で、何の用？」

「もう時間なのに着替えずのんびりしていいのかな、と思って」

姉貴の言葉に俺はハツとして、背後にある壁掛け時計を恐る恐る振り返った。そして、一度昇天した。時計の針は8時35分を差していたのだ。始業時間は8時50分。学校までは徒歩約10分。全力疾走すれば2、3分だろうか。しかし俺はまだ制服にも着替えていない。

「ダアアア、遅刻だああああ！」

俺は慌てて学校に行く準備を始めた。

姉貴はそんな俺を尻目に玄関へと向かう。

「遅刻しちゃダメだぞ京ちゃん」

笑みを浮かべた姉貴は振り向きざまにそう言うと、軽やかな足取りで家を出ていった。

「何だよそのタ○チの南ちゃんみたいな話し方は。『遅刻しちゃダメだぞタツちゃん』みたいな。浅○南は二次元だけでいいんだよ。むしろ、二次元だから萌えるんだよ。つか、お前ら名前間違えんじゃないぞ。朝倉じゃなくて浅倉だからな。なんでググると朝倉南で引っ掛かるんだよ。それから、野球部に行けば南ちゃんみたいなマネージャーがいると思ってる野郎共、失望するだけだから止めておけ。そんなマネージャーがいるわけないだろ！　てか、俺は達也じゃねえよ」

浅倉と朝倉の違い。それは一生を生きていく上で使うことなどないであろう無駄知識で、それを熱弁する俺の声が虚しくリビングに響いていた。

一人家に取り残されてしまった俺。

「クソ、覚えておけよ姉貴」

と、百人中一万人が捨て台詞だと思うであろう言葉を残して俺は支度にかかる。ん？人数がおかしくないかって？そんな細かいこと気にしてたら女の子に嫌われちゃうぞ。女の子はどうなるかって？多分男の子に嫌われちゃうんじゃないかな。オカマはどうなるかって？……知りません。ピー○さんにでも訊いてください。

俺は黒色の通学用カバンに教科書類を乱雑に詰め込んで家を出た

俺は一分後、リビングに COME BACK していた。そして一言、

「チャリがねえええええ！」

と叫びながら怒りを拳に込めて昇龍拳をした刹那、俺の瞳の中で何かが弾けた。

何が起こったのかは俺のソウルフルなボイスと昇龍拳で大体理解してくれるだろう。そう、チャリがなくなっていたのだ。しかし、俺には犯人の目星がついている。何故なら今の俺は種割れ状態だからだ。シードのファクターを持つ者のみに起きるという現象。ファーストやZで言うところのニュー○イプ状態。それにより今の俺は頭脳明晰なのだ。まずは犯行現場の状況を確認してみよう。

1. パンクしている赤いチャリが停めてあった。

2. そして、そのチャリは登校したはずの姉のものだった。

この二つから分かる犯人とは…… 突然、頭に電流が流れたかのような錯覚に陥った俺。それは一瞬の出来事で、次の瞬間には犯人が見えた。

「見える！ そこっ！」

いくつもの死線をくぐり抜けた白い機体を駆るエースパイロットと一瞬シンクロした俺は、人指し指をピンっと伸ばして右腕を高々と掲げる。そして右腕を振り下ろし、高らかに決めゼリフを言い放

っ。

「真実はいつも一つ」

俺は犯人から自供を得るためにポケットから携帯を取り出し、着信履歴から電話をかける。呼び出し音が数回鳴った後、容疑者が電話に出た。

「どうしたの京ちゃん。まさか、お姉ちゃんの声が聞きたくなったとか？」

「んなわけあるか！ それより、俺の自転車に乗ってっただろ？」

「愛しい京ちゃんの自転車に勝手に乗って行くわけないじゃない」

姉貴は俺の追及にハッキリとした口調で否定した。ならば俺は切り札を切るまでだ。

「じゃあ何で姉貴の自転車が置いてあるんだよ」

「ううっ…… そ、そりゃパンクしてたからよ」

フフフ……、かなり動揺してるようだな。そこを一気に攻める！！

「あれ？かなり動揺してるようだけど、どうかした？」

「ど、どうもしないわよ」

姉貴は嘘をつくのが苦手だ。あっさりと自らの犯行を自供する。

「その動揺ぶりからして、俺の自転車に乗ってったんでしょ？」

「だ、だってしょうがないじゃない。今日が生徒会朝礼だってことすっかり忘れてて、生徒会役員は早くいかなくちゃいけないのに自転車はパンクしてるし……」

証拠一つないのに自供するとは、コ○ンでも火サスでもお目にかかるもんじゃないよな。

「俺は遅刻してもいいのかよ!？」

「はう……、だ、だって……」

「はあ……、もういいよ」

これ以上話してたら本当に遅刻しちゃ……、遅刻？俺は耳から携帯を離して携帯で時間を確認する。

「NOオオオオオッ！」

「ど、どうしたの京ちゃん!？」

「遅刻だあああああ！」

「あはははは、遅刻しちゃダメだぞ京ちゃん」

姉貴の純粹無垢な笑顔が手にとるように分かる。しかし天使の様な微笑みも、今の俺には悪魔の冷笑にしか思えない。

「あはははは、じゃねえだろ。誰のおかげで遅刻しそうになってんだよ。それから、南ちゃんは二次元だけでええわ!」

その時、俺は重大なことに気が付いた。

「もう電話切れてるし!」

ツー、ツーという断続音だけしか聞こえてこない。

俺は携帯を制服のポケットに荒っぽくネジ込んで家を飛び出す。

外は雲一つない日本晴れ。俺の焦る心とは正反対で、どこまでも透き通るような日本晴れだった。

— F i n —

FILE 02：胸の大きさが戦力の決定的な差なのか

四月も終わりのとある休日。姉貴は高校の修学旅行で北海道に行っているため、家には俺以外誰もいない。だから、俺は誰にも邪魔されずに延々と睡眠をしているはずだった。

「起きてください先輩」

どうやら俺は幻聴が聞こえているみたいだ。誰もいないはずの家で誰かの声がするはずがない。

「先輩起きてくださいよ」

誰かが俺の肩を掴んで揺すっている気がするが、この家に俺以外いないのだ。そうか、これは地震か。揺れ具合いからして震度2くらいだろう。その程度の揺れで慌てる日本人などいるわけがない。地震大国をなめるなよ？

「いい加減起きてください先輩。……もう！」

その幻聴を最期に一時の静寂が訪れる。妙に静かだ。嵐の前のなんとかってヤツか。突如フローリングをタッタタツと走ってくる音が聞こえてきた。それはどんどん俺の寝ているベッドに近付いてくる。

「チェストー」

先程までの少女の声から格闘家の怒号に近いそれが響く。

何かと目を開けると、ミニスカートを翻して女の子が上から降ってきた。もちろん俺は重要なところを見逃さない。パンツの模様はピンクのイチゴ柄だ。

降ってきた少女は足から俺の上に落ちる。いくら身軽そうな少女といえ、打ち所によっては死に至らしめることも出来るのだ。

落ちてきた少女は俺の上で立つような感じになるが、当然の如くバランスが悪いがためにお尻から落ちる。

「あたたた……。あれ、先輩どうかしたんですか？顔が真っ青ですよ。先輩？先輩！？」

「……返事がない。ただの屍のよ——」

「誰が屍のようだって？」

「さすが先輩。反応が早いですね」

「危うく天に召されるとこだったろ！ネロとパトラッシュを拉致して行った天使がすぐ側まで来てたぞ。それに、玉がI K K Oになるとこだったろが！！」

「やゝん、恥ずかしい」

「誰がモノマネしろ言うた？ んでもって、俺が死にかけたのは何故だ！？」

「坊やだからさ」

ん〜とイチゴ柄パンツの少女Aさん、それは違うと思うんですけど。俺は殺されかけた理由を知りたいんです。

「な、なんでパンツがイチゴ柄だと知ってるのだ」

俺の質問は無視ですか。そうですか。今さら顔を赤らめて恥ずかしそうな表情でスカートを手で抑えても萌えるだけで、バツチリ、クツキリ、イチゴ柄は目に焼き付いてますから。残念!!

「まさか兄さんが覗き魔だっただなんて……。琴乃、失望したよ」

「こらこら、今の発言は読者様を混乱させてしまうでしょ。設定では姉貴しかいないことになってるんだから。それと、俺は覗き魔じゃないから」

「初期設定なんてただの飾りとです。偉い人にはそれがわからんです」

「確かに初期設定ってのは後々変わってくる場合もあるが、君は俺の妹じゃないから」

というか、女の子のクセにファーストネタに詳しすぎるだろ。さつきからファーストネタで会話が成り立ってるし。

「とりあえず、何故に俺を殺ろうとしたんだ？」

「だ、誰も兄さんとやりたいなんて言っていないもん!」

顔を赤らめてイチゴ柄パンツの少女Aは言った。……軽く問題発言だろ。そういうのはノクターンノベルでやってください。

「とりあえず朝飯を食わせてほしいんですけど」

「なんで琴乃ちゃんに俺が朝飯を提供しなきゃならなんだ？」

「兄さんだから♪」

なんですかその音符は？ それから兄さんとか言うの止めなさい。そして、人の質問に対して果てしなく意味不明な答えを言うな。

「愛ちゃんから聞いてないの義兄さん？」

兄さんの前に義を付けただけで読み方変わってないじゃん。

「そういえば愛さんがそんなことを言ってたな……」

愛さんというのは隣に住んでる美人な奥様のことで、琴乃ちゃんこと中原琴乃と愛さんは母と娘という関係になる。愛さんと呼ぶ際に『おばさん』等の年齢を連想させる呼び方をするということは身の破滅に繋がることになる俺は身をもって知っている。

隣に引っ越してきた時は俺は俺は五歳くらいだったのだが、その時から愛さんと呼ばされた。小学生の時に一度『おばさん』と言ってしまった時は――、いや、止めておこう。兎に角、血を見ずにはいられない展開になる。

「今日から旅行に行ってくるから琴乃をよろしく頼むって……」

「そういうことです」

「朝飯か。朝飯が食いたいんだな？」

俺は真剣な眼差しで琴乃に問う。

「はい」

それに釣られて琴乃にも緊張が走る。

「却下だ。俺はもう一眠りするからな。夕飯なら作ってやるぞ」

俺は手をヒラヒラと振ってベッドにダイブする。ベッドに入るとすぐに意識が薄れていった。琴乃ちゃんが何か言っているようだが無視する。

ということで、夜――

「よく寝たなあ……」

時計を確認するともう17時を回っていた。琴乃が起こしに来たのが10時だから、更に7時間も寝たことになる。

とりあえず俺は着替えてリビングに向かう。

階段を降りてリビングへと通じる扉を開けると、琴乃が倒れていた。

「琴乃ちゃん!? 大丈夫か、何があった?」

「せ、先輩……、私もう……ダメぽ………」

琴乃ちゃんの体は完全に脱力し、腕はダラリと下がる。

「琴乃ちゃーんっ!!」

俺は力の限り叫んだ。しかし、琴乃ちゃんからの返事はない。

俺は決意した。必ず琴乃ちゃんの仇を討つと

— 完 —

「え? これで終わりなんですか?」

コラコラ、ヌツコロされた子が出てきちゃ駄目でしょ。

「ええっ!? 私ヌツコロされちゃってるんですか?」

話の流れ的にはそれが妥当なんじゃない?

「つて、あなたは何処の誰よ。姿を見せなさい!」

あ、申し遅れました。私は神様です。姿を見せないのは神様が出て来たら色々と混乱するかと思って。

「ならどうやって会話してるのよ!？」

テレパシーということをお願いします。それが嫌ならニュー○イ
ブ同士の会話ってことにしてもOKっすよ？

「どっちも大差ないじゃない！」

ハア、これだからイチゴ柄パンツなんてはいているガキンちよは
困るんだよ。ニュー○イブとエスパーの違いも分からないなんてさ。
黒の勝負パンツ穿いて一昨日来やがれ、と言いたところだがしよ
うがない。私が極意を伝授してやろう。

「イチゴ柄パンツとか黒の勝負パンツは全く関係ないと思うんです
けど。それに極意なんて要りません。釘バットで打ち返したいくら
いです」

本当は弟子なんてとりたくないんだが、どうしても言うならし
ようがないな。その代わり、私のことは東西南北中央腐敗マスター
アジアと呼ぶように。

「私の話は無視ですか。シカトですか。そういうのが深刻なイジメ
に繋がるんですよ？ それにそんな名前は呼びたくありません」

まずは気配を消して、好きな娘が変な輩に襲われないように帰り
道を護衛する方法を教えてしんぜよう。

ハアああああ! ! 俺のこの手が真っ赤に萌える。あの娘を付け狙
えと轟き叫ぶ――

これぞ我が流派――

東西南北中央腐敗　最終必殺奥義――！！

『Let's、ストーカーアアアア！！』

「そんなもの必要ありません。むしろ気配じゃなくて貴方を消したいです。つーかそれって貴方はストーカーをしてることになりますよね？　そして初めての技が最終奥義ですか」

この奥義のポイントは名鏡止水の心。つまり曇りなき澄んだ心、心が清らかである必要があるのだ。

「貴方の言っていることとやっていることが矛盾しているのは気のせいですか？　貴方の心の中は欲望だけで清らかな部分なんて微塵もありませんよね？」

手厳しいなあ、琴乃ちゃんは。将来はきっとS界の女王として君臨してるよ。

「気安く名前を呼ばないで下さい。警察に突き出しますよ？」

おっと、そろそろ時間のようだ。私は三分間しかもたんのだな。

「嘘つけ。三分以上いたくせに」

それじゃ元気だな。また来るからよろ。

「二度と来るな！！」

「――で、先輩の好きな食べ物ってなんですか？」

「あの、琴乃ちゃん……」

「ん？」

「話の展開が急すぎて読者様はおろか、俺も話についていけないんですけど。特に琴乃ちゃんが倒れているところらへんとか……」

「細かいことを気にしていると女の子にモ・テ・な・い・ぞ。ウフツ」

ツツコミ所が満載で、どこからツツコミ入れようか迷いますね。

とりあえず、鼻クソみたいな点はなんすか？　そして貴方の言った台詞ですけど、第一話で似たようなの出てきましたよ。極めつけは最期のウフツって何！？　というか、それで話を流しちゃうんかいッ！！

まさかたった三行の文章で4つもツツコミ入れられるとは思わなかったね。

「べ、別に作者が途中で辻褄が合わなくなって困っちゃったから仕方なく、し・か・た・な・く出来心で悪あがきしたわけじゃないぞ？」

だからその鼻クソみたいな点はなに？

「とりあえず兄さんは好物を白状するアルヨ!!」

「えっ? な、なんで? しかも片言だし」

「見せてあげます! エプロンドレスは伊達じゃないということをして!!」

見れば琴乃ちゃんの手には白のエプロンが握られているではないか。しかもフリフリが付いていて本格的なやつ。

「つまり琴乃ちゃんが夕飯を作ってくれるってこと? いろんな意味でとっても心配なんですけど……」

「し、失礼な。クツキ○グパパと美味○んぼを完全読破している私に作れない料理などない!! それにいろんな意味とはどういうことだ!？」

「琴乃ちゃんが包丁で指を切っちゃわないだろうかとか。この世の物とは思えない乾汁みたいな味噌汁を作っちゃわないだろうかとかね」

「ええい、ツベコベ言わずに好物を白状しろ!!」

苦しいから首を絞めるの止めてくれないかな? それも顔がマジだし。殺気がビンビン伝わってきてますよ?

「わ、分かりました。好物を白状いたしますのでお許し下さい琴乃様!」

「初めからおとなしく白状すればいいのだ。我が下僕よ……」

読者のみなさまへ。これは決してSM小説ではありません。

そして、純粹無垢な良い子及び悪い子たちへ。SMについて君達は生涯知らなくていいことだ。SMの意味が分からなくても決して、お父さんお母さんに『SMプレイってなに?』などと訊かないように。お母さんはあまりのショックに寝込んでしまい、お父さんは会社をリストラされて二ート街道まっしぐらなんてことになるかもしれないぞ!? これは君達とお兄さんとの約束だ! いいね?

「……そ、その、か、カボチャの煮物とか好き、かな……」

はあ、言っちゃったよ。男のくせにカボチャが好きとか有り得ないよな……

キューーン――

スパアアアアン――

どこかで聴いたことのある音が鳴り響く。

「はうう、兄さんかあわいいい!! お持ち帰りいい!!」

こ、これが噂に聞くお持ち帰りモードというやつなのか!? ちい、連邦の白い悪魔めっ!!

「とりあえず落ち着け。というか羽交い締めにするでない! 逝っちゃうだろが!!」

琴乃ちゃんを説得すること10分――

ようやく正気に戻った琴乃ちゃんは、俺をリビングに残して台所へと行ってしまった。琴乃ちゃん曰くご飯と味噌汁と焼き魚にカボチャの煮物を作ると言っていたが、俺は心配でしようがない。以前琴乃ちゃんに作ってもらった時はサラダ油が見付からないと言って、台所用洗剤を使ってしまったという前科の持ち主なのだ。その時は肉からほのかに香るオレンジの臭いで気付いたから食べずにすんだものの、間違えて食べていたらと思うとぞっとする。

「テレビでも見るか……」

まあ、何年も前のことだし中学三年ともなれば食えるものは作れるだろう。

「痛っ!!」

小さな悲鳴が台所から聞こえた。どうやら俺の予感は的中したようだ。もしかしたら俺にはニュー○イプの素質があるのかもな。しかも琴乃ちゃんが台所に行ってからまだ10分くらいしかたってない。俺はすぐに台所へと駆けつける。

「どうしたの!？」

「指、切っちゃった」

そう言って俺に左手の人指し指を差し出す。確かに白い肌から真っ赤な液体が垂れていた。だから言わんこっちゃない。

「ちょっと待ってろ」

ジーンズの右ポケットに手をつ突っ込んであるものを探す。

「何してるの？」

「コレを探してたんだよ」

絆創膏を琴乃ちゃんの目の前で振ってみせる。

「な、なんでジーンズのポケットに絆創膏なんて入れてるのよ？」

「ニュー○イプだからさ」

「はい？」

「いいから左手貸して」

琴乃ちゃんの左手を掴んで目の前に引き寄せる――

「あっ、くっ、んんっ……、だ、ダメ。そんな強く吸われたら、わ、私……。あっ、ダメっ……。も、もっと優しくしてえ！ ああんツ
！！」

「紛らわしい声を出すでない！ 読者様が混乱するだろ」

「だって兄さんが急にしゃぶりついてきたから感じちゃって」

「しゃぶりつくとか言うな！ ただ人指し指の傷口を舐めて消毒してただけだろ！！」

「傷口を、舐める？ ……誰か、誰かあ！！ここに人の血を舐めて楽しんでる変質者がいます。早く110番してください！」

俺の嗅覚が異臭をロックオンしたのはその時だった。臭いはコンロの方から漂ってくる。恐る恐るコンロに目を向けた俺は、惨劇を目にしまった。焼き魚は消し炭と化し、鍋からは言葉で表現出来ないような異物が溢れだすという公害が発生していたのだ。

「なんで魚をコンロの直火で焼くんだよ！！」

「魚と言ったら豪快にキャンプファイアでしょ！」

どうだと言わんばかりに胸を張って答えないでください……。魚をキャンプファイアで焼いたら消し炭になるのが目に見えてるでしょうが！

「ハア、こんな腕じゃ一生お嫁にいけそうにないな」

「そしたら兄さんがもらってくれるよね！？」

振り向きざまに言い放たれた言葉。フリルの付いた可愛い白のエプロンとミニスカートと一緒に揺れる。それは不意打ちだったとしか言いようがない。とびっきりの笑顔で笑う琴乃ちゃんに俺は魅せられてしまった。

「さて、まな板まな板っ！」

俺が気恥ずかしいその場の雰囲気を変えようと発した何気無い、その一言が災いをもたらす……。

「……た……って。まな……で……」

「琴乃ちゃん？」

琴乃ちゃんはうつ向き、何やらブツブツ独り言を呟き始める。

「……まな板ですってえ!？」

刹那の静寂の後、火山は噴火した。そして、琴乃ちゃんの後ろに俺は確かに見た。漂う黒いオーラを。見る者を畏怖させる黒いオーラは辺りに満ち満ちていく。

「ど、どうかしたの？」

「胸の大きさが戦力の決定的な差なのかパーンチ!!」

眼にも止まらぬ速さで繰り出された昇龍拳が俺の顎を直撃する。

「ふべし!!」

読者のみなさまへ。奇怪な言葉を発してすまん。

「つ、つまり……、兄さんは義姉さんみたいなバイーンが良いということですね？」

あれ、何で義が付いてるのかな？　そ、それになんか眼が怖いし。てか、琴乃ちゃんの後ろに黒いオーラが漂っているのはなんでかな？　……かな？

「こうなったら毎日牛乳を飲んで大きくしてやる!!」

何やら固い決意をされているようですが、牛乳を飲んでもバイーンにはなれませんよ？

「なっ、私の心を読むとは貴様、ニュー○イプだな？ 乙女の心を持って遊んで喰い物にするなんて……、この恥廉痴野郎のコンコンチキがっ！！」

いやいや、貴方がモロくそ言葉に出してたし。てか恥廉痴野郎のコンコンチキって、言い過ぎでしょ。それに喰い物になんかしてません。

「ほ、本当に牛乳じゃバイーンになれないの？」

「へっ……？」

「だから、本当に牛乳を飲んでもバイーンになれないのかって訊いてるのよ。乙女に何度も卑猥な言葉を言わせるなんて……」

「そりゃ、あんな脂肪溜まりが牛乳を飲んで大きくなるわけなからうが」

「なら『目指せ！！毎日油1リットル以上！！』」

「バイーンになる前にメタボリックシンドロームでご愁傷様だろうな」

「図ったなっ！？ シャ○！！」

ああ、ガ○マがシャ○に向かって言った台詞ね。……俺は赤い彗

星じゃねえよ!! てか、ハメてないし。

「嘘だっ!! 私を陥れようとしたくせに!」

再びひぐらしネタですか……。

こうして俺の休日は消えていった……

— F i n . —

FILE 03…大人になれない僕らの小さな争い／枕投げ戦争開戦／

「あのお花綺麗だね」

後ろからのんきな会話が聞こえてくる。まあ、こんな場所にいればのんきな会話がでてくるのは自然だろう。ここには都会の喧騒やせわしなく行き交う人々の雑踏の軌跡はない。

「そうだな」

俺は適当に相槌を打ちながら地図と格闘していた。お世話になった農家の人が書いてくれた地図には目印になる近代的な造形物がいくつか書かれていたが、辺りを見渡せど一つも見当たらない。それどころかさっきから人一人発見することも出来ないのだ。

「なあ京、まだ着かないのか!？」

こいつの名前は野崎徹。ちなみに作者が5秒で考えた名前だ。こいつは徳明館高校に入って最初に出来た親友であり悪友である。まあ、もともとは姉貴目当てだったんだがな。

「ウツサイ、地図がおかしいんだよ!!」

「はあ、方向音痴なんかを班長に選んだのが我が小隊唯一のミスだね」

こいつ名前は高槻美咲。ちなみに俺と一緒に学級委員をやってる。

美咲はスポーツ万能で情に篤く、頼れる兄貴といった感じで男女問わず人望がある。その上なかなかの美人だ。しかしこんな奴にでも弱点というのは存在する。それは馬鹿だということ。果てしなく馬鹿だということ。クラスで、いや、学年で一番馬鹿だということだ。

「京ちゃん？ 何か今私に対して物凄く失礼なことを読者のみなさんに言っただけかな？」

「何のことだ？ それにもととの班長はお前だろ。ジャンケンで一人負けして、どうしても代わってくれて言うから好意で代わってやったんだろが！ それに小隊ってなんだよ！！」

「はて、何のことかな？」

そんなことも忘れるとは、貴様は短記憶障害なのか！？ ニワトリと同等かッ！？

「小隊。軍隊の編成単位の一。中隊の下部隊。少人数の集団。類義語、第08M○小隊。スーパー大辞林（電子辞書版）より引用」

「嘘だ！！ 大辞林に08M○小隊のことが書いてあるわけないだろ！！ それに普通は類義語じゃなくて、関連語句だろうよ」

わざわざ小隊について説明してくれたこいつの名前は鷺ノ宮結子。四角眼鏡っ娘。作者のタイプです。性格は寡黙。役回り、冷静にボケ。見た目のイメージはツンデレだが、実際はそんなことなかったりする。成績は優秀で、趣味は読書。文字通り、本の虫と言ったところだ。

「俺はっ、……生きる!! 生きてア○ナと……! 添い遂げるっ!!」

「話をややこしくするでない!!」

キレてる。キレてるよ、今日の俺。いつになくツツコミがキレてるよ。この絶妙なタイミングでのカウンターツツコミ。読者の皆さんには分からないだろうけど。

「ア○ナ様の想い人に出会う……。面白い人生だった……。だが……、負けん!!」

今度は後方の美咲が話し始めやがった。人のカウンターツツコミは無視か? というより、何でそんな台詞を知ってるんだよ!

「人の生は何を成したかで決まる。ギニ○ス様は夢を叶えられた、……立派です。ア○ナ様の望みがケルゲレンの脱出なら、それを助けるのが軍人としての私の役目。見事脱出ルートを確保してみせる!」

今度は美姫のやつかよ。しかも時間の流れ的に言ったら美姫の台詞が一番初めだろ。ちなみに美姫は冒頭で

「あのお話綺麗だね」と、言っていた不思議系ロマンスストーリータのことだ。

フルネームは安堂美姫。某有名スケーターとは漢字一つ違いだが因果関係は一切ない。容姿のほうは某有名スケーターと負けず劣らず可愛かったりする。

性格は明るく前向き。学力は最低ランク。コンプレックスは身長が低いこと。そして身長に反比例して胸がやけに大きいこと。好きなことは料理。苦手なことは料理。下手こそものの上手なれと言うが、下手の横好きとも言える。美姫は後者だな。しかも自分は一切味見せず、周りの人間に毒味させるというタチの悪さ。専らの被害者は俺。見た目はMのクセして美姫はSだ。見た目はM、中身はS。Sの女帝、安堂美姫！！

「ちょっと京くん、読者の人に変な説明しないでよお。それに最期のやつって名探偵コナ——」

「ストオオオopp!!」

俺はあわてて美姫の口を手で塞ぐ。

大丈夫、間に合った。そう、間に合ったのさ。美姫は最期まで言っていない。だからきつと読者の人も分からないさ。

「んっ、んんっ、……プハァ！」

俺の手から強引に逃れた美姫は大きく息をする。どうやら勢い余って鼻まで塞いでいたようだ。

「大丈夫か美姫？　悪かったな」

美姫には苦しい思いをさせてしまったが、姉【Sister】is FREEDAM存続の危機だったんだ。理解してくれるだろう。

しかし、俺の願いは儚くも砕け散った。

「だ、誰か助けて!!」

「どうしたの美姫!？」

「助けて美咲ちゅあ〜ん。強姦魔に襲われそうになったの!!」

そう言って美姫は美咲に抱きつく。美咲は美姫をそっと受け止め、赤ん坊をあやす母親の優しい目で頭を撫でてやる。

「よし、よしよし、もう大丈夫だよ。もう怖い叔父さんはいなからね」

美咲はまるで子守り唄を歌うかのように安らかで、平和な声で美姫に言い聞かす。男勝りな面をよく見せる美咲だが、こういう一面を時々見せるのだ。

「怖かったよう。北の工作人員がいきなり私を拉致しようとしてきて、それで……、それで私、怖くて……」

あの……、さっき『強姦魔に襲われた』って言ってたのが何故に北の工作人員に変わってるん？ それに謝ったよねえ？

「普通に謝って済むなら警察も自衛隊もインターポールもS・W・A・Tも要らないし、禿げたジジイが泣きながら謝罪してテレビの画面を汚すなんてこともないんだよ!!」

美姫の台詞を美咲が代弁して言う。二対一かよ。俺が悪いみたいな感じになってるし。

「ガキみたいなこと言うな!! それに最期のは言い過ぎだろ!」

「美咲ちゃん、京くんが怒った。怖いよう……」

「大丈夫！ 君は俺が守るから！！ 君を死なせたりしないから！」

「美咲ちゃん……」

「美咲！ お前はシン・ア○カかつ！？ ああっ！？」

「美咲ちゃん、あの人怖い……」

美姫は俺の方を指を差して言った。

「くっ！ 美姫、お前は逃げるんだ！」

「イヤッ！ ……美咲ちゃんを置いて逃げるなんて……、私……、私、出来ないよ！！！」

「ごめん。俺、正直どこでツッコミ入れているのか分からなくなっちゃった。」

「いいから逃げるんだ！！ そして生きろ！ あの鬼蓄王京介は私が食い止める！！！」

えっ？ 俺って最初は強姦魔で次は北の工作員で、最終的には鬼蓄王っていう役回りなの？

「でもっ！！ 美咲ちゃんを置いて逃げるなんて……」

「姫をお守りするのが私の使命！　そして、今がその使命をまっとうする時！！」

「美咲ちゃん……。生きて、生きて帰ってきて！！　私……。美咲ちゃん、愛してる！」

美姫は美咲に抱きつく。美姫の告白に一瞬驚いた表情を浮かべた美咲だが、美姫を優しく受け止めた。

「私は、守りたい！　姫を、姫がいるこの世界を！　鬼蓄王京介にこの世界を渡しはしない！！　私も、姫のこと愛してます」

美咲は美姫の髪の毛を優しく撫でた後、強く美姫を抱き締める。

「さあ姫、もう行ってください……」

「美咲ちゃん、生きて帰ってきてね」

「はい。必ずや姫のもとに」

美姫はずっと美咲の顔を引き寄せると、美咲の唇と唇を重ね――

「お前らええ加減にせえ！！　それに、軽く百合ってんじゃねえよ！！　ページがもったいねえだろうが！！　ゴルアアア！！」

読者のみなさまへ。大変ツツコミが遅くなってしまうすみませんでした。これからは所々省略していきます。

「初めっからそのつもりだったんでしょ」

結子、何か言ったか？

「いいえ、何も言ってませんよ作者殿」

俺たちはあれから一時間ほど歩き続けてようやく旅館を見つけた。それはとても立派な旅館で、高級感が漂っていた。門をくぐると綺麗な白石を敷き詰めた日本庭園が俺たちを出迎える。優しいオレンジがかった色を放つ燈籠の灯りが気分を和ませ、時が緩やかに流れているかのような錯覚を覚えさせる。

俺と徹が部屋に戻るとそこには俺と徹以外の男子10人が既に揃っていた。聞けばもうすぐ夕食の時間だと言う。俺と徹は急いで着替える。俺は私服か浴衣かで迷ったが、他の男子たちが浴衣を着ていたから俺も浴衣にした。徹も浴衣を選んだ。

浴衣を装着してから待つこと三分。入り口の襖を二度ノックする音が聞こえ、夕食が運ばれてきたことを告げた。

女中さんに運ばれて来た夕食はこの旅館の豪華さを象徴するかのよう豪華絢爛だった。お頭付きの刺し身やらなにやらがズラリと並ぶ。そしてどの料理も満足のいく美味しさだった。

美味しい料理に心行くまで満足した俺たちは早めに布団を敷き、思い思いの一時を過ごしていたその時、事件は起きた。

「枕投げやろうぜ！」

その何気ない一言が事の発端だった。

俺たち男子12名全員の賛成もあって枕投げをやることに。最初のうちは和やかな枕投げだった。だが頭に枕が当たったとかで次第に皆が本気になる。そしてそれは女子の部屋まで聞こえるほどになった。

「ちょっと男子五月蠅い（うるさい）わよ！！ 何やってんの！？」

学級委員の美咲を先頭に数名の女子を引き連れて来た。

「見りゃわかるだろ！？ 枕投げだよ」

俺は枕を避けながら答える。まっ、女子が文句言うのは当然だよな。

「五月蠅いからいい加減にしてよね！」

美咲の声は明らかにイラついていた。イライラは皺が増えるだけで美容に悪いんだぞ？ それに俺たちにもプライドってもんがあるのさ。

「負けられない戦いがここにある」

「へえ、枕投げかあ。面白そうだね」

美姫が美咲の後ろからひょっこり顔を出して言った。

「ストレス発散にもってこいだぜ」

「いいなあ。ねえ京くん、私も混ぜてよ」

「おう、いいぜ」

「やった。美咲ちゃんもやろうよ」

「私？ そうね、勝負事は好きよ」

結局美姫の呼び掛けにより結子と数人を除く約20人の女子たちも枕投げに参加することになった。

なんで女子の方が人数が多いかと言うと、もともと徳明館高校は大阪にあり、今俺らが通っている東京の徳明館高校は去年まで徳明館大学附属女子高等学校という名前の女子高で、俺たちの学年から共学になった。そのため女子の人数が多く、発言力は女子の方が大きい。

ちなみに今は徳明館大学附属女子高等学校から徳明館大学附属東京高等学校に名前が変わっている。

最終的な参加人数は男子12名、女子は24名の合計36名。普通の部屋じゃとても出来るような人数ではないが、俺たち男子の部屋はそれを可能にした。理由は男子12人一緒に泊まれる部屋を学校側が確保出来なかったため、偶然宴会のなかった大広間が男子の部屋になったからだ。それも真ん中にある襖を閉めて仕切りを作ることで大宴会を同時に二つも出来るほどの広さである。今は襖を閉めて半分だけ使っているが、襖を開けてフル活用すれば十分な広さになる。

人数が増えたためちゃんとルールを決めることにした。

- ・リタイアは自己判断に委ねる
- ・ベランダは非戦闘エリアとし、リタイアする場合はベランダに避難すること

・リタイア後の戦闘復帰は禁止

・武器は枕のみ

・制限時間は見回りの先生が来る10分前の午後11時20分まで

・参謀が討ち取られた時点で負けが決定

以上がルールとして定められた。

早速チーム決めを始める。まずは参謀を決めることからだ。参謀
||リーダー||学級委員、という学生の一般概念の基、俺と美咲が各
チームの参謀になるということであっさり決まった。

「おい京、ルールで一つ忘れてることがあるよな？」

「えっ……、何のことだがさっぱり分からないんだが。何のことだ
徹？」

ルールってさっきの6個だけだろ。他には聞いてないぜ。

「しらばっくれるなよ京。敗けた方の参謀はメイドコスするって罰

ゲームがあるだろ？」

「……そんな話は聞いてないよ？　というか今お前が決め——」
「みんな！！　敗けた方の参謀はメイドコスするって罰ゲームでいいよなあ！？」

俺の言葉を途中で遮ってクラスメートに呼び掛ける徹。クラスメート達は静まり返る。そうだな。そんな馬鹿げた罰ゲームを認めるはずないよな。

「メイドコス、万歳！！」

クラスメート全員が一糸乱れず高らかに万歳と叫んだのは俺の気のせいかな？　しかもバンザイじゃなくてマンセーだし。なんで朝鮮風なんだよ。

「満場一致で敗けた方の参謀はメイドコスする法案が可決されました」

「待てええい！！　美咲のメイドコスを見たがる奴はいても俺のメイドコスを見たがる奴はいないだろ！！」

「醜いぞ京。民主制の世の中で最も公平だとされる多数決において満場一致で決まったんだ。あきらめろ」

待て待て。あきらめろで納得出来るはずなろうが。しかも満場一致って俺の反対は反映されていないじゃん。これっていいじめだよな？

「大丈夫。京くんなら似合うから」

どこらへんが大丈夫なんだ？ 美姫の頭が大丈夫じゃないということはわかったよ。てか、メイドコスが似合うとか言われても複雑な気持ちなんですけど。

「おい、美咲。いいのかよこんなの認めて。敗けたらメイドコスだぞ！？」

美咲ならメイドコスに反対するさ。俺はそう思っていた。だからこそ美咲に話を振ったんだ。だがアイツは「ようは京ちゃんに負けなきゃいいんでしょ？ 私は敗けるつもりないから」なんてあっさり答えやがって。

「わかったよやってやろうじゃん！ 勝てばいいんだろ！！」

美咲には負けねえぜ！！

「さすが京。話のわかる男だぜ！！」

上手くのせられた感じがしないでもないが、そんなことよりチーム編成についてだ。このままじゃページ数が増える一方だからな。

俺と美咲のどっちのチームに入るかは好きな方を選ぶという形でやったら綺麗に半分で割れたからそのまま採用。ちなみに美姫と徹は俺のチームだ。

そして試合開始時間が刻々と迫るにつれてチームの緊張が高まる。俺たちのチームは作戦なし。とりあえず正面突破で様子を見る。それから作戦を考えることにした。

開始時間まで一分を切った時、俺たちのチームは隣の人と肩を組んで円陣を作っていた。

「何がなんでも美咲のメイドコスを拝んでやるぜ！　行くぞお前ら。
Ya——ha——！！」

「Ya——ha——！！」

俺の掛け声に応える仲間たち。そして今、戦いの火蓋が切って落とされた。

開始から10分――

美咲を参謀に構える敵チームとこちらの勢力比を見るとこちらが押され気味のようだ。それもそのはず。美咲の方には大半の男が付きやがった。男の参謀より美少女学級委員に付きたいというのは男の素直な性^{さが}なのだろう。

それにしてもアッサリと掌を返しやがって。入学した時に俺たち男子で誓いあった想い、絆はどこへいったんだか。ア○ラン・ザラに裏切られたシン・ア○カも俺と同じ気持ちだったに違いない。しかもちやっかりメ○リンを連れて行きやがって。ルナがどんなに心配したことか。やはりア○ラン・ザラは女好きのヘタレ野郎だ。間違いない！

時間が経つにつれて男子と女子との差が目立つようになってくる。

さっきまで押され気味だった勢力比は今や我軍の圧倒的不利。

「ぐあああああっ！！」

どんどんやられていく仲間たち。その叫びは数が増えるばかりだ。

「きゃあああああっ！！」

今度は女子が一人やられた。圧倒的な戦力差。味方は壊滅状態だ。

そしてまた一人、女子生徒が狙われた。

狙われた女子生徒は一発、二発と連撃を叩き込まれ、顔に苦悶の表情を滲ませる。そして、トドメの三発目が叩き込まれるその直前、俺の足は無意識のうちに動いていた。

「もう止めろ美咲！！」

今にも枕を振り降ろしそうな美咲の背後に素早く近付き、振りかざした両手ごと枕を叩き払う。

「君はいつでも邪魔だな。キラ・ヤ○ト！」

女子生徒にトドメを刺そうとした美咲がゆっくりとこちらに振り返る。

「美咲！ 俺と勝負しろ！！」

「フッフ、今日ここで因縁の対決に終止符を打つか……」

「望むところだ！」

「通算成績は99勝37敗9引き分け。今日ここで貴様を倒し、100勝に華を添えてくれるわ!!」

「99勝は俺だけだな」

「いちいち数字にこだわるなんて……。小さい男だね!」

「ぐっ……」

「京ちゃん、準備はいい?」

「ああ、いつでもいいぜ」

「「さあ、最期の闘いを始めよう!」」

美咲は一気に間を詰める。俺より身長の高い美咲はリーチが短い。だから懷に潜り込むつもりなのだろう。

「知れ! 人は自らの育てた闇に喰われて滅ぶとな!!」

完全にダークサイドですな。しかもその台詞言った奴は死んじやったしね。

俺と美咲の距離は至近距離から零距离に変わった。この距離は互いの間合いだ。張り詰めた空気が漂う。そして刹那、張り詰めた糸が、空気が、一人の叫び声によって斬り裂かれた。

「きゃあ!!」それは聞き馴れた声だった。

「美姫!? クソッ!! 今すぐ助けに行つてやるからな!!」

美咲の後方で美姫が敵兵三人と殺り合っていた。三対一の圧倒的に不利な状況。美姫はそれでも果敢に攻め続け、一人を倒した。それでも二対一。不利なことに変わりない。走って美姫を助けに行きたいが、美咲に隙を見せるわけにはいかない。

「京くん、来ちゃダメ!!」

「でも!!」

「……悲しいけど、これって戦争なのよね」

「スレ○ガー中尉——!!」

「うおおおおっ!!」

それは美姫の叫び。敵意を剥き出しにして残りの二人と好戦を繰り広げるさまはス○ラさながらだった。人は見掛けによらずと言うが、美姫は実際その通りだ。見た目からはとても好戦する人間に見えない。

「てこずってるようね。仕方ない……」

ボソッと呟いた美咲は後ろを向いて走りだす。美咲が走ってくることに美姫はまだ気付いてない。

「美姫——ッ!!」

俺の言葉に振り返る美姫。そして美咲に気付き美姫はガードを試みる、が時既に遅し。美咲の振り降ろした枕が美姫の頭を直撃。美

姫の膝が沈み、体が布団に墜ちる。

「最初は三人がかり。そしてトドメはお前……。美咲、お前は美姫があんな死に方を、殺され方して何とも思わないのか!？」

「ふふふ、何とも思わないね。戦争とは常に非情なものさ!！」

「お前……。それ本気で言ってるのか!？」

「もちろん……。本気よ?」

キュイン——
スパアアアン——

美咲のその言葉に、毎度お馴染の音と共に俺の瞳の中で種が弾けた。頭の中がクリアになる。

「キラアアアア!」 お前がニ〇ルを……。ニ〇ルを殺したああああ!！」

俺は自然と暁の騎士とシンクロしていた。今の俺には大切な仲間を失い、幼馴染みに怒りをぶつける暁の騎士の気持ちがよくわかるぜ。

烈しく互いにぶつかり合い火花を散らすビームサーベルもとい枕。

「あの……。私はニ〇ルじゃないし、死んでもないんですけど……」
ベランダで美姫が呟いたツツコミが京介たちに届くはずもなかった。

た。

「うおおおおお!!」

俺は雄叫びと共に枕で殴りかかる。それを美咲は寸前で避け、反撃に転じる。

「太刀筋……、いや、枕筋がめちゃくちゃだよ？　どうしたのかな？　京ちゃん」

「京!!」

またしても聞き覚えのある声が聞こえた。俺を京と呼ぶのはこの世にただ一人だけ。作者が五秒で名前を考えたアイツだ。

「ト○ル!?　ダメだ!!　来ちゃ!!」

犠牲者を増やしたくない。一抹の望みを賭けて叫んだ俺の言葉がト○ルに届くことはなかった。

「ト○ルじゃなくて徹だボケえ!!　って、う、うわああああ!!」

自分の後ろからト○ルが来ることにいち早く気付いた美咲は、枕を振り下ろすト○ルに対し、腰の高さのところを水平に枕を振り抜く。それは急所を射抜いた。

ト○ルは膝立ちの状態になり、そこから頭を床につけてうずくまる。それは流れるかのようにスムーズだった。体は微かに痙攣している。

「ト——ルっ!!」

「ふっ、他愛のない……」

「アアアスラアアアン!!」

友達を幼馴染みに討たれた。それは戦争だから。わかっているも行き場のない怒りと憎しみ。行き場のない怒りや憎しみを叫びに、力に、昇華させて幼馴染みに向ける。それが果てしなく続く憎しみの連鎖だとしても。最高のコーディネーター、お前もこんな気持ちだったのか？

「あああつ、京ちゃんズルイ！ 私もキラ・ヤ○トやりたい!!」

「アアスラアアアン!!」

二度目の咆哮。果てしない憎しみ。終わらない悲しみ。永遠と続く憎しみの連鎖。俺は、美咲を討つ!!

「キラアアア!! 俺はお前を討つ！ 今度こそ、絶対に!!」

どうやら美咲はア○ランで納得したらしい。

烈しくぶつかりあう枕。お気付きかと思いますが、既に枕投げではありません。枕叩きです。

二人の戦いは熾烈^{しれつ}を極めた。燃え盛る烈火の如く、勢いを増す二人の戦いぶり。それは敵味方という柵を越え、クラス全員を魅了した。誰もが勝負の行方を見守り、横槍を入れる者はいない。しかし、そんな二人の戦いにも確かに着々と終焉^{とぎ}の刻が迫っていた。

烈しい闘いの中で二人の着衣は乱れていった……。そして俺は気が付いた。美咲の浴衣のY字部分から白い肌が大きく見え隠れしているということ。

「お、おい！ 美咲、む、胸のところにしろよ！！」

「フフフ……、引っ掛かったね京ちゃん。お色気作戦に……」

「それじゃ、ま、まさかお前っ！？」

「そう、浴衣の下はノーブラ&ノーパン！！これが和服の、着物の常識。そして止まらない私の熱いパトス！！」

「意味が分からん。てか着物は確かに下着を着けないかもしれんが、浴衣と着物は別物だろ！！それに美咲はまな板なんだからちゃんと着けておかないと男と間違われるんじゃないの！？」

茶化した感じで言い放った俺の言葉が美咲を逆上させた。

「京ちゃんの、馬鹿ああああ！！」

今まで綺麗で隙の無かった太刀筋ならぬ枕筋が乱れ、隙を生じさせていた。やはりシュバ〇ツ（キョ〇ジ兄さん）の言う通りだ。怒りのスーパーマードでは敵を斬れないだけでなく、大きな隙を生じさせる。

美咲は怒りに身を委ねて枕を振り上げた。おそらくそのまま振り

降ろす気だろう。両手で枕を持って高く振り上げた美咲の体は弓反りになり、小さい胸が強調されていた。それでも小さいけど……。でも破壊力は凄そうだ。伊達に怒りのスーパーモードになってるわけではない。胸は小さいけどな……。

「胸胸胸胸、五月蠅いんだよおおお!!」

だが――

モーションが大きい!

そう瞬時に判断した俺は枕を素早く左腰に持っていく、今にも刀を抜きそうな侍みたいな体勢をとる。そして刹那、左腰の枕を抜刀する。抜刀したら左手を枕の角を持つ右手に添え、体重を右斜め前にかけて美咲の振り下ろす枕に対する回避運動をとりつつ、おもいつきり枕を振り抜いた。

その動きは野球の左バッターに酷似している。外角の球をレフト線に綺麗に打ち返すイチローを妄想すればいい。振り抜いた枕は美咲の腹部を直撃した。

「京ちゃんの勝ちだよ。まさか最期の最後で形勢逆転とはね……」

「まな板という言葉にペッタンコ的女子が反応するのは妹で実証済

みだからな（第二話参照）」

「そうなんだ……」

ピピッ、ピピッ――

携帯のアラームが鳴り響き、俺たちの戦いの終焉を、俺たちの勝利を告げた。

「ところであれって本気で言ったの？」

「『あれ』って？」

「私の胸のこと……」

「んなわけないだろ！ お前のは琴乃よりずっとあって、平均より少しちっちゃいかなってくらいさ」

「いつも私のそんなところ見てたんだ。時々胸に視線を感じると思っていたんだけど、それは京ちゃんの視線だったんね」

「ち、違っ！！ ば、馬鹿！ そんなわけねえだろ！！」

読書のみなさまへ。俺は無実です。信じてください。

「京ちゃんの変態♪」

美咲に対して軽く殺意が芽生えた今日この頃だった――

俺はこの芽が大きくならないことを切に願う。

――F i n.――

FILE 04：親友、友情プライスレス 買えるものはマスターカードで

白の内装に9月の煌めく陽射しが眩しい食堂。

白を基調とした食堂はその清楚なイメージとは裏腹に、普段の昼休みは戦場と化す。席取りに命を賭ける戦士たち。ある者は席取り出来たことを戦友たちと喜びあい、席取りに敗れたある者は購買部であんパンと紅茶を購入しクラスへと引き上げていく。それが席取りに敗れた者の運命、否、Destiny!!

だが今日はいつもと違った。いつもは生徒で溢れかえる食堂内。確かに今日も生徒たちで溢れかえていた。ただしそれは俺たちのいるテーブルから半径3mを除いてだが……

溢れかえるということは相当な数の生徒がいるということ。そして、体力を持て余している高校生が黙って昼食を食べるわけがない。

——なのに……静かだ。誰一人として喋らず、黙々と食べている。それも俺たちをチラ見しながら、否、マジマジと見ている奴らもいる。

「なあ姉貴、周りの視線が妙に突き刺さるんだが……」

俺はいろんな意味で窮地に立たされていた。

「ん〜？ 気にしない気にしない。はい、京ちゃんアーンして」

「今、食欲ないからいいや……」

嘘です。物凄く腹減ってます。勉強に疲れた頭がブドウ糖を欲しがってます。だけど……、欲しがりません、姉貴に勝つまでは！

「でも京ちゃん、カボチャの煮物好きでしょ？」

「そりゃ、好きだけどさ……」

「じゃあ、アーンして」

「もんの凄い恥ずかしいんだけど……」

姉貴の辞書に『恥じらい』という文字はないのだろうか。

「アーンして食べさせてもらうだけで恥ずかしがるなんて、京ちゃんは可愛いなあ。ウフツ」

そうじゃない。そうじゃないんだ姉貴い！！ 確かにそれも恥ずかしいが、公衆の面前でこんなことされるのが恥ずかしいんだよう！

周りを見るんだ姉貴！ いつも食堂は混んでいて相席も日常茶飯事だというのに、俺たちのテーブルから半径3m以内のテーブルには誰も座らねえじゃん！！ そして食堂で飯食ってる奴の大半が俺たちを黙って見てるだろが！！ なんで食堂に響く音が食器とスプーンやフォークがぶつかる音と、椅子と床が擦れる時に放つ少し耳障りな音だけで、誰も喋らないんだよ！！

「ほら京ちゃんアーンして」

姉貴の箸に支えられて、カボチャの煮物が俺の目の前へと進み出る。

カボチャの煮物は止まることなく確実に堅く閉ざした口へと近づく。微かに甘い匂いが俺の鼻孔をくすぐる。そして、カボチャの煮物が堅く閉ざした俺の唇に触れた瞬間、無意識のうちに俺はそれを口の

中へと招き入れていた。先程の熱く、堅い誓いなんてどこ吹く風だ。やはり人は三大欲求の一つ、食欲には勝てないことが今ここに証明された。

「美味しい？ 京ちゃん」

「ん、うん、美味しいよ」

強くなく、口の中で綺麗に拡散する甘み。柔らか過ぎず、固過ぎない丁度いい固さだ。さすがは食堂のおばちゃん。

「じゃあ今度はお姉ちゃんに食べさせて」

「えゝ……」

マズい！ マズいぞ俺！！ どうするんだよ。俺が姉貴にアーンして食べさせたら、それはもう言い逃れ出来ねえじゃん。姉貴が俺にやるのはともかく、俺が姉貴にやったら周りからは出来てるって勘違いされる！！

「アゝ……」

姉貴のやつもう臨戦体勢に入ってるし！！これだけはなんとしても回避せねばならない。碇シ○ジが言ったかどうか定かではない。定かではないが逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ……

「いや、でもやっぱ恥ずかしいし、ね……」

俺の言葉の後、何故か知らないがスプーンやフォークが食器とぶつかる音も、椅子と床が擦れて発生する耳障りな騒音も一瞬全ての

音が消えた。シラケたとも white kick とも言うな。背後から微かに、さも残念といった感じの溜め息が聴こえるのは気のせいだろうか。

「ぐすッ……」

「え？」

シラケていた食堂内の全ての生徒の視線が姉貴に集中した。これは、第一話と同じ香りがする……

「酷いよ京ちゃん……お姉ちゃんは京ちゃんにアーンして食べさせてあげたのに、京ちゃんはお姉ちゃんにアーンして食べさせてくれないの？ 京ちゃんはお姉ちゃんのことを嫌いななの？」

ポロポロと溢れ落ちる光の結晶。それは微かに紅潮した頬を伝い、透き通る姉貴の白い肌に光る軌跡を描いてテーブルへと落ちる。姉貴の透き通る瞳には俺が歪んで映っていた。嘘泣きではない。これはマジ泣きだ。

「いや別に嫌いってわけじゃないけど……」

「そんな曖昧な言い方するなんて、京ちゃんにとってお姉ちゃんはどうでもいい存在なの？」

「だからそんなことないって」

「ちゃんと答えてよ、京ちゃん……」

「だから、その……俺にとって姉貴は……」

なんで俺はこんな窮地に追い込まれてるんだよ。というかこのギヤラリー共はなんなんだ。物凄い数の視線が俺を注目してるし。これは姉貴の作戦なのか！？ 外野を自分の味方に付けるとは……流石は完全無欠の生徒会長さまといったところだ。

「わ、わかったよ。食べさせてやればいいんだろ。ほら、口開いて」
「えへへ。分かればよろしい」

あああ！！ 完全に踊らされてるよ俺。不甲斐ない、不甲斐ないぜえ。五時間目はこれを目撃したクラスメートに冷やかされるんだろうな……

「早く♪ 早くッ♪」

「わあったよ！」

俺は自分の皿から適当におかずを箸で取って姉貴の口に入れてやる。

「んー、おいちい。やっぱ京ちゃんにアーンして食べさせてもらうと違うね」

「変わらねえよ！！」と、ツツコミを入れようと思ったがやめた。

「じゃあ、今度はお姉ちゃんがアーンしてあげるね♪」

「え……」

まだこれは続くらしい。でもこれ以上は勘弁だ。今度こそ逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ……

とりあえず俺は逃げるための口実を探す。その時、時計がやけに俺の視界をチラついていた。気になって時計をよく見てみると……

「25……分…… もう25分じゃん姉貴！ 急いで食べなきゃ」

徳明館の五時間目始業は1時40分からになっている。この食堂から教室までは5分からないくらいだ。急いで食わなければ五時間目に遅刻する可能性もある。

「まだ15分あるし、のんびりしてても大丈夫だよ。それに京ちゃんのためなら少しくらい授業に遅れたって……」

急がなきゃ間に合わないかもしれないのに生徒会長様は余裕ぶっこいてるし！！ しかも授業に遅れてもいいとか言ってるしよ。生徒会長にあるまじき発言だろ……

「生徒会長が授業に遅刻しちゃダメだろ」

「ええっ！！ せっかくの京ちゃんとの密時なのに……」

「文句言わずに食う！」

「うう……分かったわよ」

名残惜しそうにたっぷり俺を見た後、渋々皿からとったおかずを自分の口へと運ぶ。

ふう……これで俺は姉貴から逃げられるぜ。さあて、俺も残つて
るやつを食うか。

そして約10分後、俺と姉貴は食堂を出た。もちろん、食堂を出る時に俺たちを見ていたギャラリー共にガンをつけながら食堂を出たのは言うまでもない。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

俺と姉貴は食堂を出て、校舎へと通じる中庭を歩いていた。手入れの行き届いた中庭はとても綺麗で、様々な植物が咲き誇っている。なんでもこの中庭は徳明館高校の卒業生で、有名な建築家が設計したらしい。

「なあ、姉貴」

俺は空を見上げて、隣にいる姉貴に言葉をかけた。蒼い空に真っ白なソフトクリームを連想させる入道雲。それはまだ過ぎ去らない夏を象徴しているかのようだ。

「ん？　なあに、京ちゃん」

「今が9月の初旬だってことわかってるか？」

「わかってるわよ。今日は9月9日でしょ」

「じゃあ、9月の初旬って残暑があって暑いってこともわかってるか？」

「そうね。今日は特に暑いわね」

さも当たり前といった口調で姉貴は返事をした。

「なら……暑いって知ってて何で俺にくつつくんじゃあああ!!」

姉貴は俺の左腕を取り、両手で抱えるようにして俺にくつついていた。俺の腕は抱き枕じゃねえよ!!

「だって京ちゃんの左腕が好きなんだもん♪」

「くつついたら暑いだろが!!」

それに左腕が好きってどういうことだよ。つか、渋谷とかでデートしてるバカップルじゃねえんだからよ。『恥』の極みだろが!!

「暑くないもん!」

「じゃあその額で光る滴はなんなんだよ」

うつすらと額で光るものを俺は見逃さなかった。

「『なんなんだよ』と訊かれたら、答えてあげるが世の情け。世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため、真実の悪を貫くラブリイチャーミングな敵役^{かたきやく}!! マムシ!! ジゴロ!! 銀河を駆けるR団の二人には、ホワイトホール、白い明日が待ってるぜ!! ニュースでニュース!!」

「誤魔化すなよ! それに一部違ってるだろ!!」

○モンなんて見てないだろが。

「誤魔化してなんかいないもん！ ホントに暑くないんだもん！！」

京ちゃんはお姉ちゃんのこと信じてくれないの？ お姉ちゃんは京ちゃんのことを信じてるんだよ……？ 酷いよ……、京ちゃん……」

「ああ、もう！！ わあったよ。俺が悪かった！」

いつになく姉貴に振り回されてるよ俺。今日は厄日か。星座占いで射手座は一位だったけどなあ……

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

俺が教室に戻ると、ちょうど授業開始一分前だった。

俺は椅子に座って机から国語の教科書とノートを取り出す。もちろん俺は既に気付いていた。みんなが俺を見ているということ。それはそうだろう。片や学園一のアイドルで天才で完全無欠の生徒会長さま。片や少し勉強が出来るだけで、見た目は普通の男。どう見たって釣り合わねえよ。つか姉弟だからこそこんな風に注目を集めるわけなんだがな。

でも一つ、訂正があった。それは、俺の周りに座る美咲や美姫、徹がいつもと変わらず接してくれたこと。なんて良い友達なんだろう。俺はその時、そう思っていた――

「なあ京」

「なんだ、徹？」

俺の前に座る徹が後ろを向いて俺に話しかける。どうせいつもみたいに宿題を見せてくれ、って頼むのだろう。そう思って俺はノートを開いて徹に見せてやったが、徹は

「宿題を見せてほしいんじゃないかってだな……」と言った。徹が宿題をやってくるとはな、珍しいこともあるもんだ。

「じゃあなんだ？」

「お前、やっぱり瑞希先輩と出来てるのか!？」

——俺は固まったよ

「……あは、あはは、あははは、んなわけねえだろ!？俺たちは血の繋がった姉弟だぜ？」

「でもよ、あんだけラヴラヴで何も無いっていうほうがおかしいよな。今日だって食堂でお互いにアーンとかやってるし」

——逝きたいと思った

「……………見てたのか……………？ 今日のこと……………」

読者のみなさんはわかっていると思うが、あのラブは姉貴からの一方的なもんだから。それにラブじゃなくてラヴかよ!

「おうよ。バッチリクツキリ見させてもらったぜ。ちゃんと——」

徹は途中で言葉を切ると、何やら制服のポケットから携帯を取り出してイジリ始めた。そして、徹は携帯の画面を俺に向ける。画面に映っていたのはデータフォルダで、そこにはいくつものファイルがあった。カーソルはフォルダの一番上になっている。

「3 g p形式……動画ファイル、か……？」

思わず独り言が洩れる。嫌な予感がするぜえ……

「ああ、その通りだぜ。ほれ……ムービーも撮っておいてやったからよ」

——死ぬしかないと思った

その言葉と同時に徹の指は決定ボタンを押していた。そして一瞬の間があった後、ムービーが再生された。しかも音声付きで超高画質。あの忌々しい記憶がそのムービーをキツカケに走馬灯のようにフラッシュバックする。それを見た俺は心の内で淡い蒼の炎が燃え盛るのを感じた。

「知ってるか？ 日本で近親婚は認められてないんだぜ」
徹のその言葉で俺の怒りが最高点に達したその時——

プチッ——

どうやらこめかみ辺りで血管が一本ほど切れたらしい。

——こうなったらアイツを討つしかないと思った

「……おっと、こんな所に六法全書が——これはきつと六法全書で徹を殴れ、との神様からの啓示に違いない!! ならばその啓示に従うまで!!」

俺はそう言って六法全書を取り出した。どこから六法全書が出てきたのかは是非、訊かないでほしい。もし訊かれても『四次元ポ○ットから』としか答えないがな。

「待て待て、今どこから六法全書を取り出した!? 　　というかお前は無宗教だろ。それに六法全書を使って殴れなんて啓示をする神様なんているわけねえだろが!!」

「ふっ、愚問だな。どこから取り出したか、だと? 　　四次元ポ○ットからに決まっているだろう。それに知らないのか? 　　日本には800万人も神様がいるんだぜ。800万人いれば一人くらいは六法全書で殴れという神様はいるだろ」

「800万人で……ホントかよ?」

「岬ちゃんが言ってたんだ。間違いない」

「美咲……ちゃん?」

「バカ野郎!! 　　Welcome to NHKの岬ちゃんだッ!!」

「Welcome to NHK?」

「NHKはそのまま、英語を和訳しろ」

「……ようこそ、NHKへ。……NHKへようこ——ああ、わかつ

たわかった!!」

「スッキリ理解出来たところで、君に二つの選択肢を与えよう。六法全書の淵で殴られるか、六法全書の表紙の面で殴られるか……どっちがいい？ 死に方くらい貴様に決めさせてやろう」

「ま、待て京!! はやまるな!」

「花丸屋!？」

「『はやまるな』だっつうの!! てか花丸屋ってなんだよ」

「知らないのか？ フラワーショップ・花丸屋ってのが近所にあるんだよ」

「知るかボケェ!!」

「ふむ……やはり俺にボケは向かないらしいな。ならばツツコミで天下を取る!!」

「……熱でもあるのか京？ いつになくキャラが違うんだが」

「熱？ そうだな。その熱は恐らく……俺の止まらない熱いパトス!! そして、この若さみなぎるパッション!! 自分でも何言ってるかさっぱりわかんねえよ。あはは、あはっ、あははは……あははははッ!!」

「救急車を呼んでやろうか？」

「冗談はよし子さん」

「こいつあマジで重症だな。救急車を呼んだ方がよさそうだ」

「何を有価証券」

「……………」

何故か徹は黙ってしまった。何故だ。何故黙っている！？

「はっ！ つい関西人の血が騒いでボケてしまったああ！！ だからさっきから徹は黙っているのか！？」

これが関西人の性さがというものなのか！？ これが若さ故の過ちと
いうものなのかああ！！

「いやいやいやいや、京は東京生まれの東京育ち。生粋の江戸っ子
だが！ つーか、さっきボケじゃなくてツツコミで天下取るとか
言うてたやろがボケえええ！！」

「ナイスツツコミ！ ナイスツツコミなんだけどお、そんなんじや
天下は取れへんさかい。天下取るにはもっとインパクトが必要や」

「いや、あの、別に天下を取るとか信長的野望は抱いてないからさ」

「どれ、ワイがお手本ちゅうもんを見せたるさかい、よく頭に刻
み込むんやで」

俺は手に持つ六法全書を高々と持ち上げる。それを見た徹は青ざ
めた顔をして

「ま、待て！！ 待つんだ京！ それは洒落にならんから！！」と
叫んだが、もう遅い。こっちは三倍の速さなんだぜ？

「MSの性能が戦力の決定的な差になると――」

「天誅!!」

俺が振り下ろした六法全書は手に伝わる心地よい感触と、ボコッという鈍い音を残して徹の意識を三途の川が見える所まで飛ばした。

友達は大切にしような。お前ら、マスターカードで友達を買えないぞ♪

— F i n . —

FILE05::LastFREEDOM(X'mas present

遅くなりました。すみません。『フラグメント!』のUPを期に書き
上げました。

—— シャンシャンシャン♪♪

赤と緑の二色が今日この日を待っていましたと言わんばかりに街を染めている。そして俺が歩いているこ洒落た商店街のあちこちは、真っ赤な洋服を着ていてカーネルおじさんにどこか似ている感じのするアンチクショウのコスプレをした若い女性がビラを配っていた。真っ赤な服に襟や袖、裾のところにある純白がよく映えている。

まさかこの街にこれほどのコスプレイヤーがいたとはな。いくらヲタ文化が世間の人たちに周知されているとはいえ、若い女性が寒い中コスプレをして堂々と街中でビラ配りをするとは……日本は、……いや、どこの国でも同じような光景なわけだし、世界はもう末期だな——などと考えつつ、顔を上げれば目の前は光で満ちていた。

普通の平日ならばどうってことない風景が、今日という特別な日だと眩しく見える。

この商店街は若者向けの雑貨屋などがたくさんあって、若者に人気の商店街のため、当然若者が半数以上を占めていて尚且つ今日は人が多い。

周りには手を繋いで歩くカップルや彼女の肩に手を回して歩くバカップル、さらに一つの長い手編みマフラーを二人の首に巻き付けて歩く超バカップルで溢れていた。その顔には自分たちは世界一の

幸せ者で、不幸になるなんて有り得ないという顔をしていた。

そして極めつけは道のだ真ん中で熱いキスを交していた、超という文字をなん文字使っても形容出来ないであろうバカップル。もし俺の右手がケーキで、左手が通学カバンで塞がっていなければ殴り飛ばしてやるとこだった。ったく今日はネロとパトラッシュの命日だというのになんて不純な行為を……

とまあ、ネロとパトラッシュを引き合いに出して恋人のいるやつらを僻んで（ひがんで）るわけだが……あー、身も心も寒いぜえ。とつと家に帰ろう……

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

家に帰るとようやく凍てつく（いてつく）ような寒さから解放された。凍てつくような寒さに身も心も打ち拉がれた（うちひしがれた）後、暖房の効いた家に帰ると生きているっていいなあ、と思うのは俺だけだろうか？　ア○ロ、俺にも帰れる場所があったんだぜ。

「おつかえり、京ちゃん！」

パタパタとスリッパの音をフローリングで響かせながら、通常よりも三割増しの速さで走ってくる赤いMS。間違いない、奴だ！

奴が来たんだ！！
あの赤い彗星のシ〇アだ……

「誰がシ〇アだって？」

「姉貴……」

「お姉ちゃんはマ○ルダさんがいいの!!」

「マ○ルダさんって誰かわかってんの？」

「えっ、あっ……う、うんとね、『それでも男ですか、軟弱者!!』って言って平手を繰り出す金髪美女でしょ!？」

そんな風に胸を張ってどうだ、みたいな感じで答えないでください。胸が大きいのはよくわかってますから。それに間違ってるし。

「平手打ちを繰り出すのはセ○ラさん。マ○ルダさんは美女だけど、金髪じゃありません」

「うう……じゃ、じゃあお姉ちゃんもセ○ラさんでいいもん！」

拗ねたのかぷいっと明後日の方向を向いて言った。

「じゃあってなんだよ。じゃあって。つか姉貴のその格好からしてシ○アザクだろ。シ○アザクって言ったらシ○アしかないじゃん！」

「どこら辺が？」

「例えばそう……真っ赤なセーターに真っ赤なミニスカートを着用しているところとか、それに指揮官専用の証である角があるところとかかな。つか、ケツにくっついてる握り拳と同じくらいの大きさで、柔らかそうな毛で作られていて見るからにフワフワそうなボンボンはなんなんだよ」

姉貴の服装は街でコスプレをしていた若い女性たちと大差ない。姉貴の着ている真紅のセーターの襟と袖、真紅のミニスカートの裾にもフワフワの白い物体が群生している。

「『なんなんだよ』と訊かれたら、答えてあげるが世の情け!!
世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため、真実の悪を貫くラ
ブリーチャーミンダ敵役!! マム——」

「もうええわ!! ……はあ、でもその服を着用しているというこ
とはついに姉貴もコスプレイヤーの仲間入り……か」

「コスプレ言うな」

「でもよ、そんな黒いリボンとかが付いてるのってアニメとか漫画
の見すぎだろ。姉貴のはヲタファッションというか、街で姉貴と同
じようにコスプレしてる人よりヲタク色の強いコスプレだろ」

「だって京ちゃんが喜んでくれるかと思っただもん。どお？ 似
合ってる!？」

姉貴はクルッと一回転して見せた。ミニスカートがフワッと膨れ
上がり、白い太股が見え隠れする。スタイルもよく美人の姉貴に似
合わない服なんてあるのだろうか。

「えっ、あ、うん。似合ってるんじゃない」

「良かったあ。この服、セーターとミニスカートで五万円もした
んだよね」

俺は自分の耳を疑った。五万円と聞こえたのは気のせいだろうか。

「へ、へえ。よく五万円もお小遣い貯めたね」

「ん？ これお小遣いで買ったんじゃないよ？」

「じゃ、じゃあ何のお金？」

嫌な予感がした。

「お父さんの机の引き出しの下に茶封筒があつて、その中で諭吉が10人も囚われの身となつていたから3人救いだしてあげたの♪」
とらわれのみ

「それを拉致っていうんじゃないかな？」

「あとは……んゝとね、京ちゃんのお小遣いを天引きしたり、天引きしたり、天引きしたり……」——俺は気付いていた。月々のお小遣いが随分前から減らされていることを。家計が苦しいからだと思つて文句一つ言わず黙っていたが、そんなことに使われていたのか。親父も可哀想に……久しぶりに家に帰つてきてお袋に内緒で貯めていたヘソクリを確認した時、10人いた諭吉が3人も減つて7人になつてゐるんだからな。

「つーかなんで俺のお小遣いが天引きされなきゃいけないんだよ！
！」

つい口調が荒々しくなつてしまう。

「うう……怖いよ京ちゃん。これはきつと、そう……カルシウム不足なんじゃないかな？ ……かな？」

首をすくめてワザと怯えるような目をして上目使いで俺を見つめる。馬鹿にしてんのか？

「五月蠅い！！ カルシウム不足じゃなくとも勝手に小遣いを天引きされてりゃ怒るわ！！」

「だって京ちゃんを喜ばせてあげようと思って買うんだから、京ちゃんがお金を出すのは当たり前でしょ？」

姉貴の口調からは罪悪感なんて微塵も感じられない。

意味のわからない屁理屈をサラツと言うでない！

「待て待て。俺のタメとか言ってるが、着るのは姉貴だろが」

「酷いよ京ちゃん……せつかくお姉ちゃんが可愛い京ちゃんのタメにと思ってお姉ちゃんのお小遣いや食費を切り詰めて、ようやくのことで買ったのに京ちゃんは喜んでくれないんだね……」

「貴方の言ってることは矛盾してますよね。さっきは俺のお小遣いを天引きしたって言ってたのに、なんでいまさら自分のお小遣いを減らしたとか言ってるのかな？ ……かな？」

「酷いよ京ちゃん……お姉ちゃんの言うことを信じてくれないの？ お姉ちゃんはいつでも京ちゃんのことをBelieveしてるのに……」

「はいはい、わかりましたよ。疑った俺が悪うござんした。何卒お許しくださいませ。姉上さま」

「うむ、わかればよろしい」

俺は殺したい衝動をなんとか抑えた。

「いっただっきまーす!!」

姉貴が小学生かと思うくらい脳天気な声で、いかにも天真万欄と
いった満面の笑みを浮かべて胸の前で手を合わせる。

目の前には豪華な食事が並んでいた。今日は特別に腕によりをか
けて作ったのだ。ちなみに品目のほとんどは姉貴からのリクエスト
だった。

ピラフにグラタンに、パスタやら、スーパーで買ってきたオード
ブルなどが並ぶ。普段使わないオーブンを使って調理した七面鳥も
あった。飲み物もシャンパン（ノンアルコール）とコーラ、なっち
やんなどバラエティに富んでいた。あれもこれも全て姉貴がクリス
マスは盛大に祝うべきだと言い出したことに端を発する。年々クリ
スマスの食事は豪華だが、今年のはいつもよりも豪華だ。

さっそく姉貴はピラフを皿に盛って口に運ぶ。

「おいしい?」

味には自信があったが、作るものが多すぎて味見をしていないの
だ。だから、自信はあっても心配になる。

「おいしい」

そう言って次々と食べていく。よほど美味しかったのだろう。黙
々と食べていた。

しばらくして、姉貴が食べる手を止めて言った。

「いや、京ちゃんの愛が籠った手料理は美味しいねえ」

「愛なんて籠ってないけどな」

そんな俺の言葉を気にすることもなく、姉貴は幸せそうに七面鳥に食らいついた。これだけ美味そうに食ってもらえると作りがいがあつてもんだ。

俺も料理を皿に盛って一口。

我ながらうまいな。

最後のケーキを俺たちは膨れた腹をさすりながら、まったりとテレビを見ていた。つかの間のくつろぎの時間だ。明日からは大掃除で忙しくなるからな。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

俺は息苦しさで目を覚ました。反射的に首を右にひねって冬の冷気を肺に送り込む。

仰向けになって上半身を起こすと、首の位置から何かがずり落ちてきた。左を向くと、姉貴が右半身を下にした状態で寝ていたのだ。首からずり落ちてきたのは姉貴の左腕で、つまり俺は姉貴に抱かれるようにして寝ていたらしい。息苦しさを感じたのは、ちょうど姉貴の胸に顔を押しつけられていたからだと推測する。

俺は抱き枕じゃねえよ！ おかげで死にかけたじゃねえか！ と、叩き起こして説教しようか迷ったが、神々しいばかりの寝顔を前に、

そんな気は失せてしまった。

消え失せた説教をする気の変わりに、新しく疑問が俺の中に浮かんだ。

なんで姉貴が俺の部屋にいるんだ？

もしかアレか？ クリスマスパワーを借りて俺と姉貴は禁断の関係に……って、そりゃないか。昨日のシャンパンにアルコールが入っていたわけじゃないんだし。

起き上がって周囲を確認するが、間違いなくここは俺の部屋だ。

昨日の衣装のまま、姉貴は隣で心地良さそうに寝ている。目の前が赤かったのは衣装のせいか。

「おい、姉貴起きろー！」

肩を上下に揺する。

数秒後、姉貴は目を覚ました。

「おはよ、京ちゃん」

「なんで姉貴が俺の部屋にいるんだ？」

「今日ってクリスマスだよね」

姉貴は俺の胸にもたれかかり、細い左手の人差し指で『の』の字を書いていた。その指には赤いリボンが蝶結びで巻き付けられている。

る。

プレゼントの催促か？

「色々とクリスマスプレゼントを考えてみたんだけどね、何すればいいか思いつかなくてね……」

ちなみに俺はペンダントを購入していた。もちろんそれほど高価な物ではないが、でも高校生という立場で考えると決して安価とも言えない代物だ。

「だから、今年のクリスマスプレゼントはね——」

そこまで言ったところで姉貴は黙りこんだ。顔は真っ赤に染まり、恥ずかしそうにウジウジしている。だがやがて何かを決心するように顔を上げて俺を見た。

「今年のプレゼントは、わ・た・し♪」

姉【Sister】is FREEDOM

—完—

FILE 05: Last FREEDOM Xmas present

おまたせしました。ようやく完成です。ながかった。ながかったよ。うう。

フラグメントの掲載を期に書き上げました。遅くなってすみませんでした。

これにてシスフリは完結です。当初はこれに続く妹【Sister】is FREEDOMっていうのを考えていたんですが、完結しそうでないうえに需要もなさそうなのでお蔵入りに^^A

今読み返してみると、ひどい出来ですね。フラグメントなんか比べると手抜き感が抜群です（笑）でも真剣に書いてますよ。ただ一人称は不向きみたいです。

あまりぐだぐだ書いても仕方ないんで、ここらへんにて。最後に。こんな小説に付き合ってくださいった皆さん、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1794c/>

姉【Sister】is FREEDOM

2010年10月9日21時34分発行